

## 論文要旨

### 黄檗希運研究——思想とその祖師像の変遷——

本研究は、黄檗希運（?—八五〇頃）に焦点を当て、彼の思想と祖師像の変遷を分析することにより、馬祖道一（七〇九—七八八）から黄檗を経て臨済義玄（?—八六六／八六七）に至る、唐代禅思想史の展開を明らかにすることを目指したものである。

これまで黄檗は、臨済宗の祖、臨済の師として重要視されてきた一方、彼の思想や祖師像の形成についてはほとんど注目されてこなかった。そして、数少ない黄檗に対する先行研究は、適正な史料批判を行わず、主観的な推論に終始するものがほとんどであった。またその際には、既存の図式——馬祖・黄檗・臨済の三者は同じ禅法を伝える同系の祖師という理解——が無批判に適応されてきた。

それに対し本研究では、文献資料を弁別し、語句の異同と思想の継承関係に注意を払いながら、黄檗の思想と祖師像の変遷に分析を加えた。

本研究は以下の三章からなる。

第一章では、黄檗の行履と語録の性質について分析を行った。まず、後に加えられる不確実な記述に注意を払い、黄檗の行履を分析し、その祖師像の祖型を明らかにした。そして、彼の言葉を書き留めた現存最古の文献『伝心法要』『宛陵録』について、中・日両国における展開と伝播を分析するとともに、『宗鏡録』における引用を精査することにより、その内容がほとんど改変を被ることなく伝承されたこと、したがって彼の思想を窺う上で両書が最も重要な資料であることを論じた。

第二章では、二節に分け、黄檗の思想の分析を中心に、馬祖禅から臨済禅への思想の流れを解明した。第一節では、これまで十分に分析されることのなかった語句の異同を精査することで、黄檗と馬祖の思想構造の差違——黄檗が馬祖禅を継承しながらも、『首楞嚴経』の独自解釈を根拠に、思想的転換を行っていたこと——を明らかにした。第二節では、黄檗と臨済の思想の差異を分析し、臨済が黄檗の思想のキーフレーズを用いながらも、黄檗の説を換骨奪胎し、馬祖に近い思想を構築していたことを明らかにした。この臨済の思想は見かけ上、馬祖禅に似ているが、黄檗の思想を通らなければ到達しないものであった。この一連の作業により、黄檗の思想が要となる、馬祖禅から臨済禅への思想史の流れが明らかにになった。

第三章では、機縁話における黄檗像の変化について、記述と思想の二つの側面から分析を行った。この作業により、黄檗像は、師の賛辞や周囲の禅僧との問答における勝利、さらには当時の宰相の帰依など多方面から宗派的要請を反映する形で変化していたことが明らかになった。

かになった。また、時間が経過するにつれ、当初の多弁な姿から、臨済の師として馬祖の「大機大用」の禅を嗣ぐ禅僧という姿に、思想的にも変化していることが明らかになった。

以上の分析により、黄檗の独自性のある思想が明らかになると同時に、唐代禅思想史における馬祖の系譜の思想の流れの中で、黄檗の思想が転換点となっていたことが明らかになった。また黄檗の祖師像については、馬祖と臨済を結びつけるという後代の人々の関心のもと、記述と思想の両側面においてその祖師像が変化していったことが明らかとなった。